

- 1、夏から秋にかけて、使徒言行録を学ぶことにいたしましたのでよろしく。
久し振りに二度ほど通読してみました。イエスの死後、弟子たちによってエルサレムに教会が起こされ、その宣教活動がユダヤ、サマリア、シリアへと広がっていく物語です。前半の中心人物はペトロ(1-12章)、後半はパウロ、「福音」はローマに至ります(13-28章)。この書物は「ルカによる福音書」の「続編」です。「ルカ」と「使徒」を貫く考え方は、「イスラエル」にもたらされた「神の救いの出来事」を、予言・成就・完成という救済史として、イスラエル・イエスの出来事・教会の働き、と大きなつながりとして捉えているところです。通読していて面白かったのは、本書の約1000節のうち約300節は、登場人物が語る二十四の「説教」や「演説」です。当時は録音機があった訳ではありませんから、これは著者の創作だと言われています。当時、キリスト教は、こんな風に説かれ、弁証されていたのだ、ということがよく分かります。
- 2、本書は優れたコイナー（共通）・キリシャ語で書かれていて、その文学的評価は高いといわれます。著者がパウロに同行していた医者ルカだという通説がありますが、それにしてもパウロの書簡に言及されず、「信仰義認論」もでてきませんから、最近では、ルカ説は取られていません。「神を畏れる」異邦人の信者の一人で、年代は紀元80-90年と推定され、場所はパレスチナ以外としか学者は言っていない。
- 3、この書物の「ブラクセイス（活動）・アポストローン（使徒たちの）」という表題は紀元2世紀後半ごろ付けられました。「ブラクセイス」に「言葉」「言行」という意味はありませんから、「新共同訳」の「言行録」は適切ではありません（「岩波キリスト教辞典」）。「行伝」（口語、文語、岩波訳、）の方が適切です。
- 4、今日は、それに因んで「イエスが行い、また教え始めてから」の一句から学びます。1-2節は、著者がこの書を「テオフィロさま」に献呈する文の中にでてきます。テオフィロは「神を愛する人」。彼については「分からない」と各注解書は言っています。「第一巻」とは「ルカ福音書」です。ルカはイエスを「この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした」（24:19）と記しました。ルカはイエスの言葉よりも行為に予言の成就をみました。イエスの言葉を聞くより、イエスの奇跡を見ることを優先させます。（マルコは業と言葉（1:27）、マタイは言葉優先なの比べて）
- 5、言葉で「信仰告白」が表現出来ない障害者の受洗の問題で、かつて止揚学園の福井達雨さんは、身体的表現（行い）が言葉に優先すると申しました。イエスの招きに応えることの大切な意味が含まれています。今度、奥中山教会を訪問し、重い知恵遅れの方が受洗した恵みを、教会が大変大事にしている出来事にであって、このテキストの意味をあらためて思いました。